

自らの工芸の立ち位置を正確に知る機会

若杉聖子（陶芸家、フランスのリモージュのAIRを経験／兵庫県）

私は、今週の月曜日にフランスから帰ってきました。ここ何年かはずっと個展を中心に日本で活動していて、個展のスケジュールに追いかけられつつ制作をする日々です。

これから40代、50代を迎えるにあたって将来を考えたとき、いまは体力があるものの、これからどうすべきかと考えた3年前に、フランスで展示の機会をいただきました。ほとんど海外経験がなかった私ですが、文化庁の新進芸術家海外研修制度に応募してフランスに行きました。すると、フランス人と日本人の陶芸家の表現の仕方があまりにも違うことに興味をもって、私はフランスに滞在することに決めました。

今回の1年のフランス滞在はリモージュを拠点にしたのですが、制作が目的ではなく、日本のやきものの立ち位置、工芸の立ち位置を正確に知ることでした。たくさんのものを見ることで自分を想像力の領域を拡げることが目的でした。工芸作家にとって海外に販路を拡げることはとても魅力的ですが、その前に自分の立ち位置を正確に知ることが本当に重要だと思いました。

今日はたくさん写真を持ってきていますので、駆け足でご紹介したいと思います。

〈資料1〉はリモージュの町並みです。最初はリモージュの国立高等美術学校でAIRをさせていただいたのですが、レジデンス施設があるわけではなく、なにもかも自分で用意しました。最初の3週間ほどは、フランスの学校で働いておられたジャン・フランソワさん宅にホームステイさせていただきました。フランス人の家庭料理や生活習慣はとても新鮮でした。生活を楽しむ、日常を大事にする生き方がとても印象的でした。

フランスに行ってすぐにテロがありました。海外経験がなくて外国人と接するだけでも怖くてたまらない私ですから、テロは本当に怖かった。リモージュは日本の多治見や信楽のようにやきものの生産地ですから、多くの工場見学をしたいと思いました。〈資料2・3〉

私は、主に石膏型での鋳込みを使って造形的な作品と器を制作していますので、型を見たり工場見学したりはとても勉強になります。こちらの工場〈写真4〉では、エルメスの下請けなどもされていました。

リモージュは中世の町並みを残す都市ですが、国立高等美術学校は鋳込みの設備がすごく充実していて、私にはやりやすい環境でした。〈資料5〉アーティスト専用のスペースがあるわけではなく、学生に紛れて制作する感じでした。個展のスケジュールに追われて制作するのとはちがい、いつもより割型を多くしてみたり……。では、挑戦的なことができたかと問われるとわかりませんが、学生の型のつかい方を見ることだけでもおもしろいことでした。

これは、泥漿を攪拌するスクリューになっていて、私もこれにしました。〈資料6〉

すこしだけのものもつくってみました。ふだんは素焼きをし、それをまた紙やすりで磨きます。ふだんは水の中でやすりがけをしますが、空研ぎにも挑戦してみました。〈資料7～9〉

私の住んでいたアパートの近くにあるベルナルドの工場の見学ツアーです〈資料10～12〉。道具は日本と少し違うところもあるのですが、基本的には同じです。

リモージュの焼きもののお店には、原型が飾ってあることがあります。〈資料13〉

一方、プロヴァンスには家族経営の工場が点在しています。〈資料14〉

セーヴルの美術館を訪ねると、現代陶芸の展覧会が開催されていました。〈資料15〉作品を写真といっしょに飾ったり、展示台がやきものでできていたりと、展示の仕方を楽しめました。〈資料16〉

〈資料17〉は学生の卒業制作です。やきものですが、異なる素材が組みあわさっています。〈資料18〉

〈資料19・20〉は、焼きあがった私の作品です。

セーヴルの裏に工場があって、その見学のツアーです。〈資料20・21〉このようにいろいろなものを見ることができます。やはり職人さんの技術は確かなものです。

最近、フランスで日本の現代陶芸に関する本が出版されました。表紙の作品は、陶芸の森にも滞在された桑田卓郎さんの作品です。〈資料22〉

〈資料23〉は私のページです。この出版記念で座談会が開催されました。そのなかで話題に上ったのが、日本にはやきものの技術を学べる学校がたくさんあるが、フランスには技術を学べる機会がないのが悩みだという指摘でした。職人さんの技術はとても高いが、アーティストの技術はそんなに高くないのです。

印象的だったのは、セーヴルで職人さんとコラボレーションしてつくられた作品です。

〈資料24〉鋳込みでつくられていて、ユニークなのはその売り方でセット売り。1個では買えません。

〈写真25〉は、知り合いのダニエル・ポントローさんという彫刻家のアトリエです。土や鉄など、いろいろな素材を使われる方です。

これはアンティーク・ビエンナーレを見に行ったときの写真です〈写真26〉。アンティークといつても、現代美術をはじめ、アフリカン・アートから日本美術までたくさんの作品が展示されています。驚いたのは、その規模です。日本のアート・フェアとはまったく規模がちがいました。

〈資料27〉は知り合いのギャラリーのブースですが、日本美術専門で、とくに竹がとても人気でした。ロンドンのアート・フェアにも行きましたが、竹はこちらでも人気でした。

こちらはイギリスの作家さんの作品だと思うのですが〈資料28〉、パリでも見ましたし、けっこう人気なようです。

これは大英博物館で、石膏もいっしょに展示されているのがおもしろいと思いました。

私のアトリエは兵庫県三田にあるのですが、写真は三田青磁の土型です〈資料29〉。型がとても美しいので、常に見られるところがあればよいなと思います。（了）



〈資料 1〉



〈資料 2〉



〈資料 3〉



〈資料 4〉



〈資料 5〉



〈資料 6〉



〈資料 7〉



〈資料 8〉



〈資料 9〉



〈資料 10〉



〈資料 11〉



〈資料 12〉



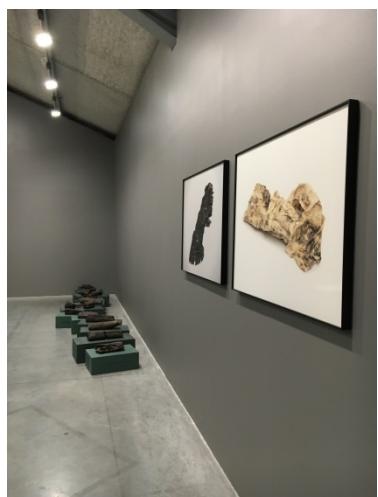
〈資料 13〉



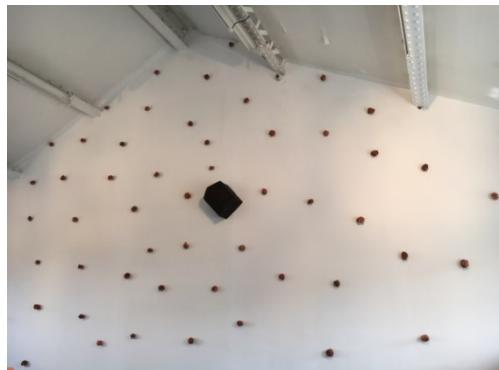
〈資料 14〉



〈資料 15〉



〈資料 16〉



〈資料 17〉



〈資料 18〉



〈資料 19〉



〈資料 20〉



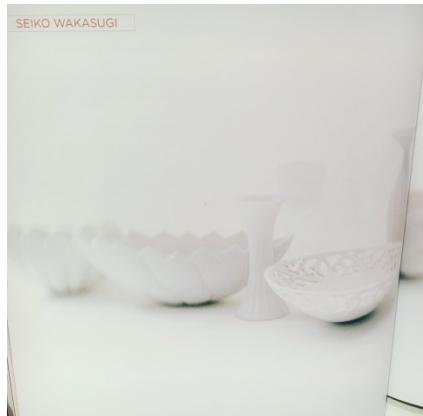
〈資料 20〉



〈資料 21〉



〈資料 22〉



〈資料 23〉



〈資料 24〉

国際シンポジウム「関西アーティスト・イン・レジデンス in 信楽」
パネル・ディスカッション1



〈資料 25〉



〈資料 26〉



〈資料 27〉



〈資料 28〉



〈資料 29〉